

日本老年看護学会創立30周年記念シンポジウム
第1部 現場に生きる知と制度をつなぐ：学術研究による認知症ケアの発展

認知症ケアに関する学術的取り組みの
変遷と社会への発信

北川 公子
共立女子大学看護学部

この30年間の学術的取り組みを総括する資料として、本学会誌「老年看護学」の1巻1号から29巻2号に掲載された、「認知症(痴呆や認知機能低下を含む)」をタイトルに含む研究論文の掲載年、タイトル、筆頭著者に注目した。掲載論文460編のうち、「認知症」をタイトルに含む論文は115件で、4分の1を占めていた。10年単位の論文数は、1996～2005年36編、2006～2015年34編、2016～2025年45編と増加傾向にあった。また、実践現場に所属する筆頭著者による論文は、4編→3編→8編と直近で大きく増加した。さらにタイトルに注目すると、1996～2005年は痴呆性老人や痴呆性高齢者が用いられ、摂食、排泄、転倒などケア技術や、症状への対応困難を課題とする論文がみられた。名称変更以降の2006～2015年では認知症高齢者が用いられ、介護者支援、教育、倫理的課題、多職種連携など認知症ケアを取り巻く状況に注目した課題が多かった。そして2016年以降では「認知症の人」や「認知症のある人」を用いた論文がみられ、意思決定支援、急性期病院でのケア、身体拘束、地域包括ケアなど施策に絡む課題がみられた。

本学会の委員会活動においても2016年以降、施策に関連した社会への発信が推進され、2024年には『「急性期病院における高齢者のフレイル予防・回復に向けた看護」への提言』を発表した。また、今年度は、2016年に公開した『「急性期病院において認知症高齢者を擁護する」日本老年看護学会の立場表明』を認知症基本法に対応した内容へと刷新を図り、「認知症の人と医療機関の架け橋となる看護への提言」として公開の準備を進めているところである。

【ご略歴】

共立女子大学看護学部教授。千葉大学大学院看護学修士課程、国際医療福祉大学大学院医療福祉科学研究科博士後期課程修了。老人ホーム、病院での臨床経験を経て、1990年から看護学教育・研究に従事。東京医科歯科大学(現、東京科学大学)、北海道医療大学等を経て、2013年4月から現職。専門は老年看護学。